

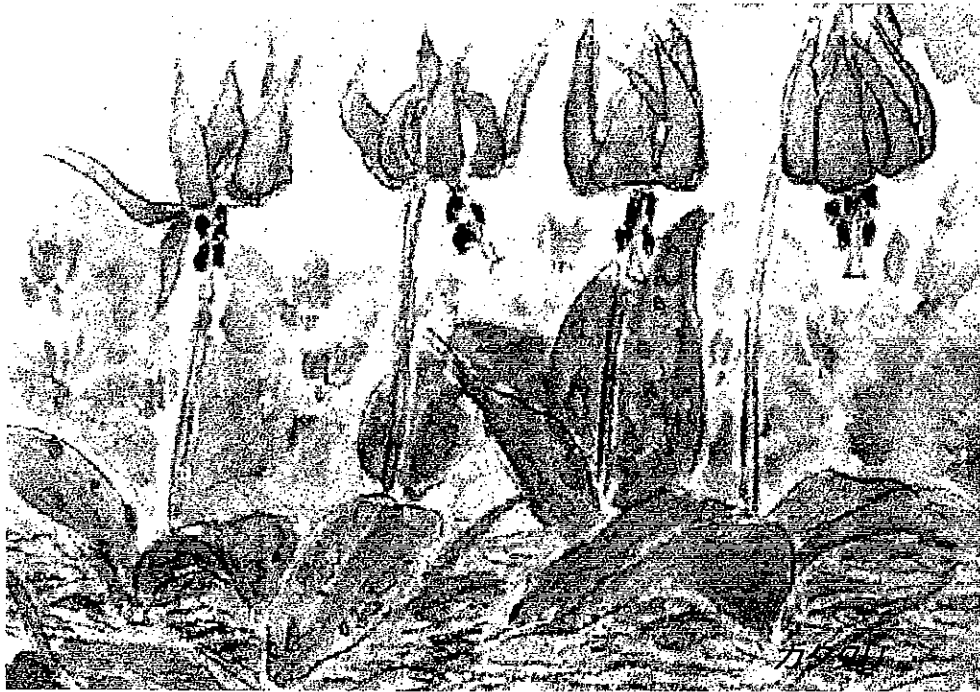
奥多摩の春



奥多摩

《創刊号》

平成18年4月15日
奥多摩観光協会



～季節だより～

奥多摩の春一番といえば、御前山のカタクリでしょう。御前山は、標高1,404mもあるどっかりとした雄大な山です。しかし、都心からは大岳山の後方にあるため隠れた存在です。普段は、静かな山歩きが楽しめるのでファンが多い山です。ところが、春の御前山ルートはカタクリ銀座通りに変身します。カタクリを見るなら御前山に限ると、毎年訪れる人が多くなりました。カタクリは、青空と太陽が大好きな花です。天気の良い日を選んでお出かけください。多摩の丘陵地で見ると3月ですが、ここ奥多摩では4月になってからです。過酷な自然環境に耐えて咲く山の花には、花の色だけでなく、葉茎を含めてどことなく凛とした美しさを感じます。

カタクリの一生には、ドラマがあります。美しく咲いた花は、時たま訪れるギフチョウなどに花粉を運んでもらい、結実した種子は、アリが運んでくれます。運よく芽が出て7～8年も暑さ寒さを生き抜かなくては、あの美しい花を咲かせることはできないのです。そんなカタクリをみんなで大切にしましょう。

奥多摩の春は、カタクリが咲くと、目に見えて春めいてきます。野の花、山の花が次から次へと咲き、まもなく新緑の季節を迎えます。

沢沿いのルートには、地味な花が多いネコノメソウの仲間のうちでは異端児のハナネコノメがかわいらしい花を咲かせます。かわいそうなのは、ヨゴレネコノメ。名前ほど汚れていませんので出会ったら、なぐさめの声をかけてあげてください。

山の春は、樹木も元気を取り戻します。名前が面白いアブラチャンの黄色い花は、沢沿いの道に。よく似たダンコウバイは、山中で見かけます。

大木になるカツラは、葉っぱが出る前に花が咲き、黄色い花粉をいっぱい飛ばします。奥多摩の方言でカツラのことを「しょうゆの木」といいます。一度、木のそばに行くと匂いをかいでみてください。自然観察では、五感を大切にします。五感を鍛えると、いざという時、あの第六感が冴えるのだそうです。

奥多摩の春は、今が旬です。この時期にぜひとも「来させえ、奥多摩へ」お待ちしております。

～ 来 ま つ せ え ～

新緑の海沢滝めぐり

行 先：海沢三滝

開催日：5月15日(月)

海沢には、四季を通じて老若男女が十人十色の思いを持って訪れています。森林浴・川遊び・山登り・観察会など思いは様々です。リーダーの苦勞を吹っ飛ばしてくれるのがこの海沢三滝です。

奥多摩駅から約1時間30分程度、森林浴を楽しみワサビ田を見ながら歩くと、海沢園地にたどり着く。園地から5～10分の移動で三つの滝(三ツ釜の滝・ネジシの滝・大滝)が楽しめます。

数億年の大地の変化が創り出した特異な造形美の三滝は、都の文化財にもなっているここだけの自然です。

帰りは、釣堀や温泉を楽しむコース、大櫛峠を経て御岳山へ登るコース、大櫛峠から松ノ木尾根を経て鳩の巣駅へ出るコースなど、四季の変化を楽しむことの出来るコースがあります。

現在、木の芽が大きく膨らんでいます。「どんな葉や花になるのかな～」 見に来させえ！

シロヤシオの花を訪ねる

行 先：そば粒山

開催日：5月17日(水)

奥多摩では、このシロヤシオは、同じヤシオツツジの仲間である早咲きのアカヤシオと共に川乗谷流域の岩が点在する尾根でよく見られます。栽培種を除けばツツジの仲間では白色は珍しく、多摩川流域では他にコメツツジが見られるだけです。

このシロヤシオを訪ねる山行は、日原からヨコスズ尾根を多摩川と荒川との分水嶺まで登り、東に向います。左に秩父に下る道を分ける仙元峠の先で巻き道と別れ、尾根筋に付くしっかりとした踏み跡をたどると、やがて急に視界が開けます。そこがそば粒山で、標高は1,473mです。

山頂には、石灰岩の露頭があり、腰を掛けたり、風をしのぐのに格好の場を提供しています。ここから南東に延び川乗山に至る草原の帯は、山火事の延焼から水源林を守る防火帯です。

ここからは、川乗谷の支流である桂谷を経て川乗谷林道へと下っていきます。

～ 行 っ て き た あ ゃ ～

コアシサイ咲く大塚山

古里駅から大塚山を経て鳩ノ巣駅までのハイキングコースです。歩行距離が長いので健脚向きです。古里駅から10分程度で登山口に着きます。6月には、山道にコアシサイが咲き続いて楽しませてくれるはず。他にも小さな山野草が彩りを添えてくれます。

このコースは、古里と鳩ノ巣から御岳神社へ参詣するための裏参道です。尾根近くに、ひときわ大きなスギが目につきます。これは「飯盛りスギ」と言われていて願い事が成就すると、ここに山盛りの飯を供えたと言伝えられています。

山頂は広く奥多摩の山々の眺めが疲れを癒してくれます。帰途は山頂を通り抜けて、御岳ビジターセンターから鳩ノ巣方面を目指します。この間、タンナサワフタギやオオバアサガラ等の花も目につくようになります。大櫛峠を過ぎてしばらく行くと、集落廃屋跡があり昔の暮らしが偲ばれます。ここに奥多摩民話「おたく婆あ」の話があります。登山口と下山した所に綺麗なお手洗いがあり、登山者への優しさを感じさせてくれます。

春の奥多摩むかし道

昔、青梅街道と呼ばれた甲州に通じる交易の道が、町の人々の努力により昔の姿を残し、「奥多摩むかし道」として、平成の初めに生まれ変わりました。

このコースの良いところは、どの年代の方でも安心して歩けることです。国道と平行しているので、疲れたりアクシデントの場合、直ぐに国道に出てバスなど車で移動ができます。駅から奥多摩湖まで景色を眺め、語らいながら歩け、ゆったりとした道幅で快適です。急坂を登りつめ、サイカチの巨木・馬の休み場・馬頭観音、足元にジウウニヒトエやタチツボスミレなどの花。おどろおどろしいマムシグサでさえも、ぐいっと伸びた姿に春の勢いを感じます。

弁慶の腕ぬき岩やお地蔵さんに見送られ、シダクラのつり橋をコラコラと。渓谷沿いを行けばヤマザクラと萌黄色に芽吹く山肌が幾重にも重なりお内裏様の十二単の襟元のよう。

額に汗する頃、満々と水をたたえた奥多摩湖に到着。さすが一昨年、新聞社の里山百選一位に選ばれた理由もナットク！奥多摩の人気スポットです。

～奥多摩登山考～

奥多摩に出た山賊

05年5月26日、爽やかに晴れた午後2時40分、警視庁の通信指令本部から「日原で強盗事件発生」の第一報が奥多摩交番にもたらされた。日原集落のYさん宅に、顔中血だらけの男性がかけ込んで来て、「強盗にやられた」と110番通報を依頼してきたというものである。

交番にいた山岳救助隊員は騒然とした。日原駐在所のM隊員は、この日は週末のため駐在所は留守である。私も慌てて拳銃をつけ、耐刃防護衣を着込み、奥多摩交番にいたT救助隊長以下4名が先発としてパトカー2台に分乗し、サイレンを鳴らして緊急走行で日原に向かった。

110番したYさんの家は、日原集落でもいちばん高いところにある家だ。日原から、三ツドツクとも呼ばれる天目山に続くヨコスズ尾根の登り口にある家で、車道終点から徒歩で5分ほど登った所だ。

息を切らせてYさんの家に登っていくと、玄関前に、顔を傷だらけにし、衣服を血で染めた登山者と思われる男性がうずくまっており、玄関のガラス戸は閉まっていた。

玄関のガラス戸を叩き、警察官であることを告げると、鍵が開けられ戸が開き、制服を見て安堵の表情をしたYさんが顔を出した。血だらけの男性が助けを求めてきたので、恐ろしくて玄関の戸を閉めたままで男性の言うことを聞きながら110番したのだという。

私は玄関前にうずくまっている男性から事情を聞いた。男性は都内H市に住むN(81歳)と名乗り、頭を押さえたタオルは血で染まり、顔の傷も痛々しいが、意識や話す言葉はしっかりしていたので、救急車が到着するまでの間、できるかぎりくわしい情報を聞き取るうとした。

Nさんは、朝方、車を日原の駐車場に停め、ヨコスズ尾根を天目山に登った。午前11時ごろ、稜線一杯水避難小屋に着き、中へ入ったところ、小屋の中には50歳ぐらいの男性登山者がひとりいた。その男性は酉谷山から登ってきたが、途中で一泊野宿をしたと言っていた。

男性と世間話をしたあと、おたがいのカメラで写真を撮り合った。写真を送るので、と名前を聞くと、男性はF市のHと名乗った。

その後あたりで天目山に登ったが、Nさんは男性に「私は年寄りで足が遅いので先に下ります」と言って、ひとりで下山をはじめた。約1時間して、滝入ノ峰を

過ぎたあたりで、先ほどの男性が追いついてきた。「近くで猿を見た」などと話していたが、いきなり「この野郎、気に食わねえな」と言いながら、持っていた木の杖を振り上げてNさんの頭を殴りつけてきた。

男とは何の言い争いをした覚えもなかったし、何が原因で男が豹変したのか分からなかった。Nさんが「何するんだよ」と言うと、「気に食わねえんだよ」と言いながら、なおいっそう興奮して杖を振り上げ、手当たりしだい頭を殴ったり、顔を突いたりしてきた。

Nさんは手で頭をかばいながら、このままでは殺されると思い、恐怖のあまり「何が欲しいんだ」と言うと、男は「財布をだせ」と言った。Nさんはポケットから、6000円入りの財布を取り出して男に渡すと、男はそれを受け取り「ザックを下ろせ」と言う。Nさんは背負っていたザックを下ろし、その場に置くと、今度は背中を足蹴りにされ、Nさんは前の斜面を転げ落ちた。

10メートルほど転げ落ちて止まったが、今度は上から大きな石を投げつけてきた。Nさんは近くにあった岩の陰に隠れて難を逃れたが、しばらく投石は続いた。

30分ほどすると静かになったので、上を見ると男の姿はなかった。Nさんは足にケガを負わなかった。登山道まで登り返し、下山を始めると、すぐ下に自分のザックがひっかかっているのを見つけた。下りて中を確認すると、デジタルカメラがなくなっていた。

ザックを背負う元気もないので、水だけを持って助けを求めて下山し、1時間ほどかかって最初の民家Yさん宅に辿り着き、110番通報を依頼したと語った。

私はNさんに男の人相などを聞くと「年齢は50歳ぐらい、身長は155センチぐらい、やせ型、白の野球帽、ネズミ色のシャツ、ベージュのズボン、黒のスニーカー」などとくわしく話した。

後続の山岳救助隊、青梅署の刑事、機動捜査隊、消防の山岳救助隊、救急車などが赤色灯をつけ、けたたましくサイレンを鳴らして駆けつけ、東京都の西の外れ、鍾乳洞で有名な日原集落は騒然とした空気に包まれた。

T救助隊長とM小隊長が刑事課員を案内し、Nさんのザック回収と現場確認にヨコスズ尾根を登って行った。

Nさんは救急隊による応急手当てののち担架に乗せられ、Yさん宅から車道まで設置してある荷物運搬用のモノレールで車道まで下ろされ、救急車で病院に搬送された。

暗くなる前、犯行現場を確認に登ったT救助隊長らが、Nさんのザックを回収して下山してきた。滝入ノ峰周辺はヨコスズ尾根が最も狭まった場所で、数年前の冬に高校の先生が倉沢谷側へ180メートルも転落して死亡した事故も発生した、尾根上で唯一ともいえる危険箇所である。幸いその場所よりも少し下方の傾斜が緩やかな場所だったので、Nさんは10メートルほどで止まり、下まで落ちなくてすんだ。

事件を刑事課員に引継ぎ、山岳救助隊は奥多摩交番に引き揚げた。

しかし現実にこんなことがあるものだろうか。大金を持ち歩く登山者などそういるものではない。金品を得るために、登山者の頭を狙い、杖で殴打して登山者の反抗を抑圧し、金を盗ったあとは崖から突き落とす。さらには大きな石を投げつける。まかり間違えば強盗殺人にもなりかねない。

我ら山ヤにとって「山は神聖なもの」「山に登る人に悪人はいない」などと言って登り続けてきた。しかしそれは、あまりにも手前勝手な思い込みであって、山に登るものにだって悪い奴はいる。実際、奥多摩の山においても、親切な善人をよそおって、「登山口まで乗せていってやる」とか「駅まで送ってやる」などと言葉巧みに登山者を自分の車に乗せ、隙を見てザックの中から財布やカメラなどを抜き盗る悪党や、避難小屋に寝泊りし、管理人になりすまして宿泊者から料金をだましとったり、林道に停めてある登山者の車のガラスを割り、中から金品を盗む車上狙いなどもいるにはいる。こんなのは登山者の風上にもおけない輩だ。

しかし登山者の生命、身体に危害をおよぼすような犯罪は、私が山岳救助隊に入ってから一度もなかったし、全国の山でも聞いたことがない。奥多摩の山をそんな桁外れの悪人が跋扈しているのだろうか。

救急車で病院に運ばれたNさんは、右手骨折などにより全治二ヶ月と診断され、そのまま入院となった。そして翌日、この事件は新聞で大きく報道された。

この事件以来、青梅警察署山岳救助隊では山岳パトロールを強化した。たまたま同時期に、人のいないキャンプ場や溪流釣り場に忍び込んで、食料を持って行くコソ泥が横行し、それが人目を忍んで山の中を移動しているのではないかという情報もあって、隊員が複数でパーティを組み、登山道のパトロールをするともに山小屋や避難小屋などの捜索を行なった。

6月に入ってから、連日のように山間部の空き家や別荘、山の稜線にある酉谷山避難小屋、一杯水避難小屋などの捜索と、登山道のパトロールを続けた。

6月8日、この日は山岳救助隊員15名総出で大がかりな捜索が行なわれた。私は山岳救助隊でいちばん若

いS隊員と、峰谷の浅間尾根に登り、鷹ノ巣山避難小屋を捜索したが異常はなかった。鷹ノ巣山頂まで登り上げ、昼食後、日原方面に稲村岩尾根を下りはじめた。

奥多摩きっての急な登山道を、慎重に下っていると、午後2時、O隊員の至急報無線が警視庁を呼び出している。指令本部に対し「天目山の一杯水避難小屋に、先日同様の血だらけの登山者が寝ており問いただしたところ、今日の朝早く強盗にやられたと言っている。先日の強盗がまた現れたものと思われる」との一報であった。

O隊員はこの日、T救助隊長、Y隊員と3名でヨコスズ尾根を天目山に登り、一杯水避難小屋を捜索している班である。

私はS隊員と稲村岩尾根を走るように下りはじめたがすぐにやめた。このまま日原に駆け下っても、朝早く人を襲った犯人が近くにいるわけもない。無線のやり取りを聞きながら「ちくしょう、またやられたか」と地団太を踏むような気持ちで下った。

最初の犯行には半信半疑だったものが、これではっきりした。そんな凶悪な強盗犯人が奥多摩の山を横行しているという事実に、私は少なからずショックを受けた。

無線連絡では、T救助隊長らが一杯水避難小屋に到着して中に入ると、布団を被って寝ている登山者がいる。声をかけると血だらけの男性登山者が体を起こしたという。登山者は都内M区居住のT(77歳)と名乗り、気が動転して話す内容もハッキリしないが、一杯水避難小屋に同宿した男に殴られ、金を盗られたというものであった。

私は無線でO隊員を呼び出し、「応援部隊及び捜査員をハンギョウ尾根の荷物搬送用のモノレールで上げ、被害者をそのモノレールで降ろして病院に収容した方が早い」旨を指示し、S隊員と下山を続けた。

私たちは夕方、奥多摩交番にもどったが、天目山の班はまだもどっていなかった。いまモノレールで下山中だという。

暗くなってから交番にもどったT救助隊長から、被害者Tさんの言動を聞いた。Tさんは二日前の6月6日にヨコスズ尾根から天目山に登り、一杯水避難小屋に泊まった。当日小屋を利用した登山者は5名だったという。昨日の7日は酉谷山に登り、一杯水避難小屋に帰って来たのは午後1時ごろであった。

(以下、夏号につづく)

(青梅警察署山岳救助隊副隊長 ^{こん} 金 邦夫)

奥多摩昔語り

奥多摩町の地名から、この稿を進めます。

さて、奥多摩町内の地名は、最初どのようにして付けられたのでしょうか。奥多摩町で現在使われている公式地名は、大字(おおあさ)が15字と小字(あさ)が527字あります。これは、明治9年、維新の新政府が地租(ちそ、土地税)改正を行なった際、従前からあった地名を取捨選択して決めたものでした。

地名は、もともと、住人の共通の目印であり、屋号なども取り込んで、都合よく付けられています。川井(かわい)の尾崎(おさき)は、尾根が突き出ている地形、「尾根の先のこと」に付けられた地名です。ここには、伝説が残っています。

『平将門の従者で尾崎十郎という者と、多摩川を挟んだ対岸の浜竹という所には、浜竹五郎という者がいて、それぞれ柵を構えていました。十郎の息子と五郎の娘は相思相愛の仲でした。その夜も恋人に逢うために若者が多摩川に架かるつり橋を渡っていると、二人の仲を妬む者の仕業により、突然つり橋

が切れました。若者は、川床へ打ち付けられ、数日後、下流の村で哀れな姿となって発見されました。それを知った娘は、嘆き悲しんで、自分も恋人の後を追って深淵に身を投じたのでした。』

「尾崎」の先端が多摩川に張り出した下に青みどろの淵があり、地元の人々は、そこを「姫が淵」と呼んでいます。

川井は、奥多摩町の大字的の一つで、明治12年まで、武州多摩(麻)郡川井村と称していました。明治17年には、11か村の連合戸長役場に属し、明治22年、市町村制の実施により、古里村、氷川村、小河内村が誕生し、川井は字名だけになりました。奥多摩町内のその他の大字も、川井と同様の経緯を辿りました。

【資料】 新編武蔵風土記稿、奥多摩町史、広報おくたま、西多摩郡史

山の花だより

御前山へカタクリの花を見に行くと咲いている花を紹介します。

◆ アズマイチゲ

姿かたちは、弱々しそうな可憐な白い花。それでも早春の寒さの中で咲くだけの力を秘めた春咲きの大和撫子。最近では、日本の大和撫子は絶滅種(?)ともいわれていますが…。

アズマイチゲの花を見るには、太陽がさんさんとふりそそぐ日中に限ります。太陽に向かって花開く姿は、まさにパラボラアンテナ。早春花フクジュソウと同じく花びらを内側にそらせて太陽光を中央の雌しべに集め、暖かい所に虫がやって来て花粉を運んでくれるのを待っています。

奥多摩湖側から登り、体験の森に下ると、自生地の関係でどうしても午後になってしまうので、美しい開花状態で見る事ができないのが残念です。

◆ ハシリドコロ

春植物の中でも代表的な有毒植物です。毎年のように、中毒したというニュースを聞きます。芽だしの頃、みずみずしい葉を摘んで誤食する人がいます。走り回って苦しみ、根っこがオニドコロのようなのでこのような名前がつけられました。ナス科の植物なので特徴のある鐘形花を見れば、だれも判別でき

るはずですが、新芽の時期は要注意。

奥多摩では、芽生えが早いことからユキワリソウという呼び名や、かつて、製薬会社が住民に呼びかけて薬草として買い取ったので、社名をとって「ロート」と呼ぶ人もいます。やや湿り気がある谷筋でごく普通に見られます。

◆ コチャルメルソウ

御前山へカタクリを見に行った帰り道、体験の森がある栃寄の沢で見かけるコチャルメルソウ。まさに屋台のラーメン屋さんが吹くチャルメラのミニサイズを思い起こす。小さい草丈なので、見落とししてしまいます。ルーペ持参でお出かけを！



ハシリドコロ

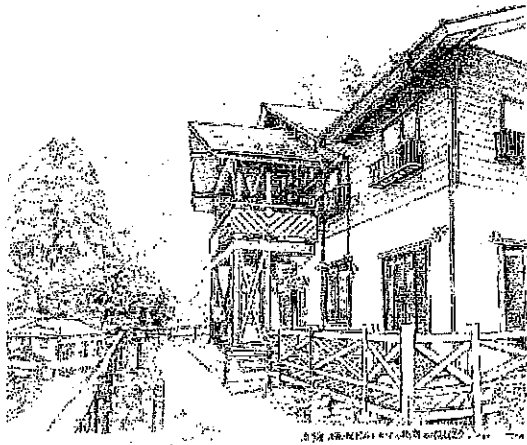
施設案内

◆ やすら樹の宿『ねねんぼう』

奥多摩型エコツーリズムの拠点として、平成16年にオープンしました。

巨樹ツアーなどの自然体験を中心に滞在型でゆっくりと奥多摩の自然と暮らしを体験できるプログラムを用意しております。

利用案内：一般宿泊 一泊2食 6,000円～
昼食弁当 500円～
基本的には5人以上のグループで
申込み問合せ：奥多摩町日原 848-1
電話 0428-82-0788



◆ 『奥多摩水と緑のふれあい館』

水と緑と奥多摩を再発見する場所。そして人と自然、都市と水源地のよりよい関係を考える場所です。

問合せ：奥多摩町原5番地 (但し水曜休館)
電話 0428-86-2731



イベント案内

奥多摩町と観光協会では春から夏に向けてイベントを用意しております。「名人・達人観光ガイドの会」のガイドがご案内します。

希望者は往復官製はがきに参加したいイベント名・住所・氏名・年齢・電話番号(2名様まで)を明記の上、奥多摩観光協会へ(申込み多数の場合は抽選)。

- ① 4月29日(祭日) ヘルシーウォーク4時間
1千名でむかし道を歩きます。
応募締切日 4月18日まで (ハイキング)
- ② 5月15日(月) 新緑の海沢の滝めぐり
2頁参照
応募締切日 4月18日まで (一般健脚)
- ③ 5月17日(水) シロヤシオ咲くソバツブ山
2頁参照
応募締切日 4月20日まで (登山)
- ④ 5月26日(金) 新緑の奥多摩湖右岸ハイク
応募締切日 5月8日まで (一般健脚)
- ⑤ 6月14日(水) 妙琴蟬(エゾハルゼミ)を訪ねる倉戸山
応募締切日 5月18日まで (登山)
- ⑥ 6月20日(火) 大塚山のコアジサイを訪ねる
応募締切日 6月6日まで (登山)
- ⑦ 7月13日(木) 金袋山の巨樹を訪ねる
応募締切日 6月18日まで (登山)

募集人員：①以外は30名

参加費：500円

(保険料、資料代他、交通費を除く)

《編集後記》

季刊「来させえ奥多摩」創刊号をお届けします。四季折々のおたよりをご覧いただき、ご活用くだされば幸いです。

発行：奥多摩観光協会

住所 〒198-0212 奥多摩町 氷川 210

電話 0428-83-2152 Fax 0428-83-2789

編集：名人・達人観光ガイドの会